



TITLE:

日本語接辞にみられる否定の意味
的多様性とその体系的分類(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

久保, 圭

CITATION:

久保, 圭. 日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類.
京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20465>

RIGHT:

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	久保 圭
論文題目	日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は日本語の否定接辞の記述的研究であり、否定接辞の個別の意味的特徴を明らかにすることで否定接辞の体系的な分類を行い、否定という意味の多様性を示すことを目的とする。本論文は全6章から成る。</p> <p>序章に続く第2章では、否定に関する先行研究を概観し、主な研究対象とされてきた言語現象とその記述を確認する。従来の否定研究は二値的な論理学的否定観を前提としてきたため、その意味の探求が等閑視されてきた。しかし日本語の否定接辞については、その種類が豊富であることに加え、「非公開」「未公開」のように否定接辞の交替によって意味が変化するという事実から、論理学的否定観の限界を指摘する。本論文では、否定接辞がそれぞれ異なる意味側面から否定を表すと想定し、次章以降の分析の方向性を示す。</p> <p>第3章では、日本語の中心的な否定接辞「不-」「無-」「非-」「未-」の意味と用法を詳細に記述する。コーパスから収集した事例に基づき、それぞれの接辞が接続する語基の意味特性を「価値特性」「動的特性」の観点から捉え直すことにより、接辞個別の特徴づけを行っている。具体的には、「不-」がある事物の状態や行為が望ましい水準を超えていないことを意味し、語基には肯定的価値特性を要求するのに対し、「無-」は語基の表す事物・行為が存在しないことを意味しており、価値特性を特に問わない。一方、「非-」は語基の表すカテゴリーに所属しないことを意味し、カテゴリーという概念が関与する点において「不-」「無-」とは性質を異にしている。また、「未-」は語基の表す行為が十分な段階にまで至っていないことを意味し、語基が時間的な動的特性を備えていることに加え、その行為の達成が望ましいものであることから肯定的価値特性も認められる。これらの特徴づけをふまえ、本章では新規用法である「不非-」「非不-」という二重否定接辞表現についても取り上げ、「不-」と「非-」の意味的特徴づけを補強している。</p>			

第4章では、日本語の接辞「脱-」「元-」「前-」について事例研究を行い、語基との共起関係について考察する。これらの接辞は状態の変化によって否定の意味を表出しており、第3章で扱った「未-」と動的特性の点において共通していることから、「脱-」「元-」「前-」が間接的に否定を表す準否定接辞と位置づけられることを論じる。次に、これら3つの準否定接辞について事例分析に基づき特徴づけを行っている。「脱-」は望ましくない状態から望ましい状態への推移を表し、価値特性が深く関与する。一方で、「元社長／前社長」のように、職階や職名に接続しやすい「元-」「前-」の区別については、「元-」が語基の表す対象の属性に焦点を当てた解釈、「前-」が語基の表す対象の履歴に着目した解釈を喚起することを示している。

第5章では、「偽-」「似非-」など、「似て非なる」を表す接辞について事例分析を行い意味的観点から分類している。これらの接辞は、語基の表す対象に比してある部分では類似しているが別の部分では異なることを強調し、結果的に否定の意味合いを添えることから、準否定接辞と位置づけられる。第4章の「脱-」「元-」「前-」が状態の推移によって否定を含意するのに対し、これらの接辞は語基の表す対象への認識および現実との対比によって否定の意味を生む。「偽-」は、実際の性能に関わらず、本物ではないと認識された場合に使用されるのに対し、「似非-」は性能の低さに焦点を当てており、むしろ本物かどうかは問わない。また、「疑似-」は機能性に焦点を当て、語基の表す対象の本質的な機能を欠いたものであると認識された場合に使用される。本章では接尾辞の「-もどき」と「-まがい」も取り上げ、「-もどき」が中立的評価をもつ語基と共起しやすく「-まがい」が否定的評価をもつ語基と共起しやすいことを指摘し、両者の相違が動詞形「もどく」と「まがう」の項構造に起因することを示す。

第6章では、事例研究を行った12の接辞の個別の意味的特徴をまとめ、否定の意味的多様性を示す。本論文の成果と手法が従来の否定研究、ひいては意味論全般に対して貢献するものであり、第4章・第5章における準否定接辞の考察は、否定研究または否定接辞研究の新たな領域を開拓するものであることを示唆し、本論文の結論としている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語の否定接辞の事例分析を通じて、否定の意味とその多様性を探求した研究である。日本語の豊富な否定接辞を取り上げ、各接辞の意味的特徴を体系的に分類することで、否定の概念が実際には多様性を備えたものである点を実証的に示すことを目的としている。以下、本論文がどのような意義をもち、日本語学をはじめとする関連研究分野にどのような示唆を与え貢献し得るものであるかについて述べる。

本論文の主要部である第3章から第5章は、日本語の否定接辞についての事例研究であり、コーパスから収集した事例に基づき観察と分析が展開されている。代表的な日本語否定接頭辞である「不-」「無-」「非-」「未-」に関しては、日本語形態論をはじめとする先行研究および記述を丹念にふまえ、意味的観点からの記述がいまだに十分になされていないという重要な指摘を行っている。その上で、個々の接辞の語基との共起関係を詳細に観察し、「動的特性」「価値特性」を主軸とする新たな意味分類を提示している。

本論文の最大の特長は、間接的に否定を表す準否定接辞の提案と分析にあると言える。第4章での接頭辞「脱-」「元-」「前-」、第5章での「偽-」「似非-」「疑似-」および接尾辞「-もどき」「-まがい」が間接的に否定の意味を供するという主張、これらを代表的な否定接辞と関連づけ分析するという試みはいずれも独創的であり、否定という概念の広がりをも十分に裏づけるものとなっている。

また、本論文は否定接辞という言語現象の記述を主体とした研究ではあるが、その分析および考察にはイメージ・スキーマやカテゴリー化といった認知言語学の概念が有効に適用されている。このことにより、各否定接辞に固有の意味的特徴を浮き彫りにするだけでなく、取り扱った否定接辞に体系的な分類を行うことが可能となっている。

本論文は、論理学での二値的な否定を前提とした従来の否定研究に疑問を投げ、否定接辞の分析を通して否定の意味的多様性を示している点で高く評価することができる。それぞれの否定接辞が固有の否定の意味を持つという想定に基づき、日本語の代表的な否定接頭辞から準否定接辞に至るまで、幅広い対象を扱った本論文の事例分析は、従来の否定研究や日本語形態論における接辞研究に対しても多くの示唆を与えるものである。

一方で、本論文には課題も残されている。各接辞の意味的特徴づけに合致しない若干の反例が存在するが、それらを取り扱うには接辞自体の意味拡張の可能性を考慮に入れた分析を行う必要がある。また、本論文では事例が主にコーパスか

ら収集されているが、データの量的分析を主張の根拠として活用する余地がある。これらはいずれも、申請者の今後の研究で改善・発展が十分に可能である。

また、本論文の研究成果は日本語教育にもおおいに寄与する。日本語教育では否定接辞に関する詳細な導入がなく、日常的に高頻度で使用される表現であるにも関わらず、どのように使い分けられているかは指導されていない。こうした現状を受け、本論文の成果は日本語教育の現場に対し直接的に貢献するものであり、意味に基づいた日本語の指導は学習者にとって有益なものとなることが見込まれる。

以上、本論文は、言語学において本質的な問題のひとつである「否定の意味」というテーマに独創的な視点から取り組んだ意欲的研究であり、その成果は高く評価することができ、今後の言語学及び関連諸領域への貢献が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年11月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公開可能日： 年 月 日以降